ヴァージニアの蒼い空

林 京子

中央公論社

ヴァージニアの蒼い空

林 京子

中央公論社

ヴァージニアの蒼い空

定価一二〇〇円

昭和六十三年五月十五日印刷
昭和六十三年五月二十五日発行

著者　林　京子
発行者　嶋中鵬二
印刷所　図書印刷
製本所　大口製本
発行所　中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九八八　検印廃止
ISBN4-12-001687-0

目次

ヴァージニアの蒼い空　9
1　バンクーバーの乱気流　10
2　かゆさんの手紙　12
3　グッドモーニング・レディズ　15
4　カルチュア ショック　17
5　セイフ ウエイ　21
6　α君の心音　26
戦後四十年の〝戦勝国〟で　31
1　「ダイナスティ」と「若草物語」　31
2　国籍の選択　34
3　DOGWOODは州の花　38
4　アメリカのゴミ収集車　39
5　ウルフトラップに行く　42
6　天の怒りにふれた火の神　48

国籍にこだわらない若人たち　51
1　町から村から的ニュース　51
2　クリスマスとささみとジェネレイション　54
3　α君始動開始　58
4　レーバー・ルーム　61
5　産んだのはパパ？　62
6　女はよくやるよ　66
7　並んだ小実昌帽　68
8　グッド・ラック　68
異国で暮す異国人の妻　70
1　ウルフトラップがめぐりきて　70
2　花見と燻製鮭のカマ　74
3　柔らかい手のひら　80
4　瑛子の留守番　84
法律に弱いと困る国　88
1　ワシントンD・Cの魚河岸　88

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2 職業別年収 91
3 大雨と大雷と大家さん 94
4 ラベンポートさんの七ツ道具 97
5 アンディそしてベラフォンテ 101

多民族国家の悩み 106
1 大雪が降る 106
2 郵便局と公衆便所で順番を待つとき 108
3 瑛子のナーサリー退学？ 111
4 定員十五名 117
5 グルメとマクドナルド 118
6 MARILYNとMARLENE 120

魚屋、歯医者、精神病院 124
1 シーッ、ベイビイ、ノウ 124
2 国境の内と外 128
3 ハワイのマグロ 130
4 アメリカの精神病院 132

5 顔と頭の大きさ 136
個人を尊重する国で、なぜ 141
1 今年の蝉は赤茶の目 141
2 バスに乗る 143
3 ……カクアリタイ 148
4 AIDS 150
5 Tさんの祈り 152
ハロウィーン、クリスマス 155
1 アメリカの晩秋 155
2 消防車のサイレン 158
3 嫁だってヨイヨイ 161
4 アイ・ガット 162
5 BLUES ALLEY 164
6 ハロウィーンの夜 166
7 やがてクリスマス 171

アメリカという国は面白い　174
1　生放送　174
2　マホメット・アリ　176
3　アメリカの幼児たち　178
4　科学を受け入れない村　181
5　バスケットのなかの赤ちゃん　185
6　ビーバームーン　189
さようならヴァージニア　191
1　終りの冬に　191
2　レッドスキン優勝で大騒ぎ　192
3　「おーい、キッコーマン」　194
4　質問の仕方　197
5　スミソニアンの国立図書館　199
6　瑛子再度の退園申し出を受ける　202
7　別れに　204

装画　川村みづえ
装幀　中島かほる

ヴァージニアの蒼い空

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ヴァージニアの蒼い空

現在（一九八五年八月）私は、アメリカの首都ワシントンに近い、ヴァージニア州の小さい町に住んでいる。生活をはじめて約二ヵ月、日常はそろそろ惰性の色を深めてきている。主婦の生活は何処にいても変らない、ということだろうか。但し、「家事に限り」と注釈がいる。そしてさらに、家から歩いて買い物にいける範囲にスーパーマーケットがあれば、の条件がいる。車の運転と、居住している州の運転免許を持っていれば、その日からでも食生活は困らない。運転も出来ず、スーパーマーケットもないとなると、食べるにも事欠く。アメリカは車社会である。「車で何分」が生活の基礎になっている。惰性といいながら、やはり生まれ育った国とは違う。話せない不便は行動を重くして、家にこもりがちになる。さしあたり私は、息子桂の家の居候であるから、積極的に生活する必要がない。中心にある主婦は当然大変である。以上のような理由から、これから書くことは、「ついて歩きの記」ということになる。

1　バンクーバーの乱気流

飛行機は墜ちないためにひたすら飛び続ける。成田空港を発ってニューヨーク・ケネディ空港に着くまでの十二時間三十分の間に、悟ったことである。悟った後、いっそう沈鬱な気持に私はなった。右側の窓からのぞくと、肩越しに翼がみえる。翼の下にロケット弾のような筒がついている。あれが飛行を続けるためのジェットエンジンなのか。小刻みに震えているようにみえる。ねじはしっかりねじまわしで留めてあるのか。ゆるみがないか確かめているうちに舌が乾いて、私は目をつぶった。離陸して八時間。予定通りの飛行なら、アメリカ大陸の上空にさしかかるころだ。その辺り——約八時間後にアメリカ大陸にさしかかりますが、バンクーバー上空に気流の乱れがあるとの報告が入っております。それ以外はおおむね良好のようです——成田を発ってすぐに、飛行予定の報告があった。短かい報告のなかに二つ、私を不安にする材料があった。一つは八時間後の、バンクーバー上空の気流の乱れ。一つは、おおむね良好のおおむね。八時間後の気流の乱れは、それほど心配ではない。八時間も先の話である。相手も気長に、待ってはいないだろう。やっかいなのはおおむねの方で、病気、面接試験、入学試験、小説の出来不出来にいたるまで、おおむねいいです、といわれて、よかったためしがない。落し穴は確実な言葉遣いにはなく、ぼかし言葉の方だ。さいわい飛行時間の三分の二は平穏に終った。安心して椅子の背に身

をあずけて、配られたリンゴジュースを飲んでいると、ガタガタと秘かに、ぶれがきた。続いて上下、縦横、大小の震動。

ここがバンクーバーなのか、と窓から眼下をみた。それまで幾度か、銀波の太平洋をみようとガラス窓に頬をすりつけたのだが、青い空と浮き雲しかみえなかった。

高波がぶつかるような衝撃を受けながら、健気にも飛行機は飛び続けている。大陸に入って高度を下げたのか、山の連なりがみえる。紫色をおびた緑の、山々である。山の先に平野がみえ畑があり、赤土の道がみえる。人家も点在してみえる。震動は、平穏な眼下の生活に関係なく続いている。ここにも人がいますよォ、と私は小さい声で、走る車に呼びかけた。誰か一人ぐらい、空を見上げているだろう。万が一の場合、声をかけていれば気が済む。いかなるときもコミュニケーションは必要だろう。救援活動も早いほどよい。

震動は静まった。改めて私は、地上の風景に目を移した。広い畑である。整然と、角は角ばって角々と、畦道のない畑は直線に伸びている。目の下の大地がアメリカ合衆国なのか、まだカナダなのか。いずれにしても、さすがにトラクターの国である。一年前、金沢から東北を旅したときの風景を、私は思い出した。農夫が二人立てば、一人は日本海に転げ落ちてしまう、狭い座布団のような稲田が崖っぷちに、段を重ねて丁寧に耕やされていた。広いよ、と隣りの席に坐っている美子に、私は話しかけた。アルファ君が動いてるう、と体をずらして坐っている美子が、薄目をあけていった。揺れたからね、と答えて、私はα君の頭らしきあたりを軽く叩いた。αとは、

桂の命名である。一足早くアメリカで生活をはじめている彼から美子にきた便りのなかに、プラスα君は元気ですか、とご機嫌伺いがあった。それ以後α君と呼ばれている。そしてα君はまだ美子の胎内にいる。美子は桂の妻で、α君は二人の、はじめての赤ん坊である。胎内生活六ヵ月のα君は——あるいはαちゃん——どうやら臆病者のようだ。乱気流に驚いたのだろう。それでいて頑固で、日本を発つ十日も前から頭を上に、逆児として頑張っている。頭がかるいのねきっと、と母親の美子はときどき歎いている。逆児は産み月になると、医師が正常な位置に正してくれるそうだ。医師の話によると、心配はいらないという。世に出るまでの十ヵ月、気儘に羊水に浮いているのも悪くないだろう。

しつこい乱気流であった。バンクーバーには、むかしうちのおじいさんが行ってたらしいのよ、と美子がいった。大正十年ごろの話である。郷里の墓石に刻んであるそうだ。なぜ行ったのかと聞くと、むかしのことだからわかんない、と美子が答えた。三十歳になるかならないうちに逝った祖父の家には、白地に赤と緑のストライプが入った毛布が、あったそうだ。桂と新婚旅行にいったカナダで、寸分違わない色と柄の毛布を、店先でみつけたという。ほんとうに来てたのだって、懐かしかった、といった。

2　かゆさんの手紙

成田空港を発ったのは、六月七日の正午である。ケネディ空港に着いたのは六月七日、ニューヨーク時間の午前十一時三十分である。離陸した時間より三十分前に、アメリカに着いた計算になる。日本とアメリカとの間にまたがる十三時間の時差が、この狂いを生じるらしい。空港に出迎えてくれた桂が、十三時間の説明をしてくれても、私には理解出来なかった。四年前上海を訪ねたとき、時差は一時間だった。一時間の時差ぐらいなら、理解出来なくともポケットかハンドバッグにねじ込んで、知らぬふりも出来た。今度は十三時間。時差ぼけはない？　と聞かれても、ぼける以前の事柄が理解出来ていないから、ぼけようがない。ただ既に消化してしまった時を目の前に積み上げられて、その処理に困惑しているだけである。

ケネディ空港からワシントン・ナショナル空港までさらに一時間。空港から車で二十分、ヴァージニア州の小さい町にある桂の家に着いたのは、夕方の四時すぎ。私より早く、かゆさんからの手紙が届いていた。かゆさんとは、女学生時代の友人の仇名である。手も足も洗わずに、ソファのないカーペットに横坐りして開封。――成田のホテルからの葉書みたとき、フッとかなしさが胸をつきました。これを書く人が他にいただろうという思いがしたのです――。読みながら、そんな人いやしません、と私はいった。日本を発つ最後の夜に、想いをめんめんと綴る相手がいるぐらいなら、アメリカまできたりはしない。彼女の手紙にあるように、日和下駄を天に高々と抛り上げ、あーした天気になあーれ。裏？　表？　の人生うらないである。

しかし、なぜアメリカのヴァージニアに現在住んでいるのか。日本を出発する前、友人や世話

になった人びとに、私は挨拶状を出した。ある友人は、なぜアメリカに、と驚きの問いを返してきた。女学生時代の友人の多くは、八月九日、学徒動員中に被爆している。私も工場動員中に被爆した。いうまでもなく、原子爆弾を落したのは、アメリカである。そして恩師からも、手紙を頂戴した。八十歳を越された師は、白内障の不自由な視力で、かつて敵国であったことを忘れないように、とマジックペンで書かれていた。あと一人の師は、充電でしょう、とかゆさんに問うてこられたという。あと一人の師は挨拶に伺うと、アメリカ婦人や家庭生活をみてきなさい、それでいい、といわれた。どの言葉も胸に熱い。胸に刺さった。師や友人たちの言葉を反芻しながら、私はアメリカの空を眺めている。なぜアメリカにいるのか。理由は単純である。桂のアメリカ駐在について、生活の場を日本からアメリカに移しただけである。桂と美子と私は、彼らの結婚以来同居している。共同生活は八年目になるそうだ。三人とも仕事をもち、各人が生活費を出しあって、今日まで暮してきた。桂について渡米するため、美子は退職した。退職を決心した後、α君の存在を知ったのである。美子は結果的に、アメリカで出産することになった。私は、出産する美子の身辺を、看ることになるだろう。がこれも結果で、目的ではない。

ヴァージニアの空はあくまで高く、広い。新しい住宅地は、視界を邪魔する高層ビルディングがない。青空との接点は木々の梢である。空がこれほど広くおおらかで、木々が天をつくまで成長する可能性をもっていたことも、長い間私は忘れていたようだ。この空に向かって、あした天気になあれ、とボルチモア経由の船便につんだ鎌倉彫りの下駄を、いつか抛り上げてみよう。裏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com